

# Cloud Access 時の サブスクリプション管理

2021-12-27  
森若和雄

# この資料の目的

対象: Red Hatから直接サポートを受けられる RHELを購入し、Cloud Accessプログラムに参加しているPublic Cloudへ持ち込む人

目的: 契約を守るためには何らかの形で保有しているサブスクリプションで許可されているノード数やvcpu数を越えていないことの確認が必要なことと、利用可能な選択肢を案内する。

# 概要

- Red Hatとの契約を守るには.....?
- Cloud Access関連用語
- Cloud Access時のサブスクリプション管理
  - Red Hatの仕組みを利用せず、自分で数える
  - Cloud Access Customer Interface + subscription-manager
  - Hybrid Cloud Console の sources機能
- まとめ
- 関連リンク集

# Red Hatとの契約を守るには.....?

契約を守るためにはノードやvCPUを数えて「購入しているサブスクリプションで対応する数を越えていない」と確認する必要があります。

「RH00004 Red Hat Enterprise Linux Server, Standard (Physical or Virtual Nodes)」を1本持っていてパブリッククラウド環境で利用する場合を考えます。このサブスクリプションはRHELが含まれる仮想ノード2つまでの実行に対応できます。3つ目以降の仮想ノードを作成する時には追加の購入が必要です。

**組織全体で適切にノードやvCPUを数えて対応するだけのサブスクリプションを購入することが必要です。**

# Cloud Access関連用語

Cloud Access: (クラウドプロバイダーではなく)Red Hatから直接購入したRed Hat製品を持ち込むプログラム

Gold Image: Cloud Access時に使う仮想マシンベースイメージ、記述時点ではAWS、Azure、GCPでのみ提供

Cloudigrade: パブリッククラウド上のRed Hat製品を数えるシステムの名前。

# Cloud Access時のサブスクリプション管理

3通りの方法があり、選択できます。

- Red Hatの仕組みを利用せず、自分で数える
- Cloud Access Customer Interface + subscription-manager
- Hybrid Cloud Console の sources機能

# Red Hatの仕組みを利用せず、自分で数える

## マッチするケース

- アクティブかつ未使用の Red Hat サブスクリプションがあり、クラウドで使用する予定。
- 仮想マシンイメージの構築と管理ができ、それらのイメージをクラウドにインポートする方法について理解している。
- **ゴールドイメージを使用する必要または予定がない。**
- クラウドでの Red Hat サブスクリプションの使用状況の追跡を支援する必要はない。
- Red Hat の製品およびクラウドプロバイダーの対象となる**ガイドラインを理解して準拠できる。**

契約を守るために**数を適切に把握できる**必要はありますが、その**方法は台帳やCMDBなど、何でもかまいません**。Red Hatが提供する仕組みを使わないことは問題なく可能です。

# Cloud Access Customer Interface + subscription-manager

## マッチするケース

- アクティブかつ未使用のRed Hat サブスクリプションがあり、クラウドで使用する予定。
- ハイブリッドクラウドインフラストラクチャー全体でRed Hat サブスクリプションおよび目的のエンタイトルメントの使用状況を一箇所で表示および管理する必要がある。
- Red Hat の製品およびクラウドプロバイダーの対象となるガイドラインを自分で考慮するつもりがない。
- **ゴールドイメージを使用する予定。**

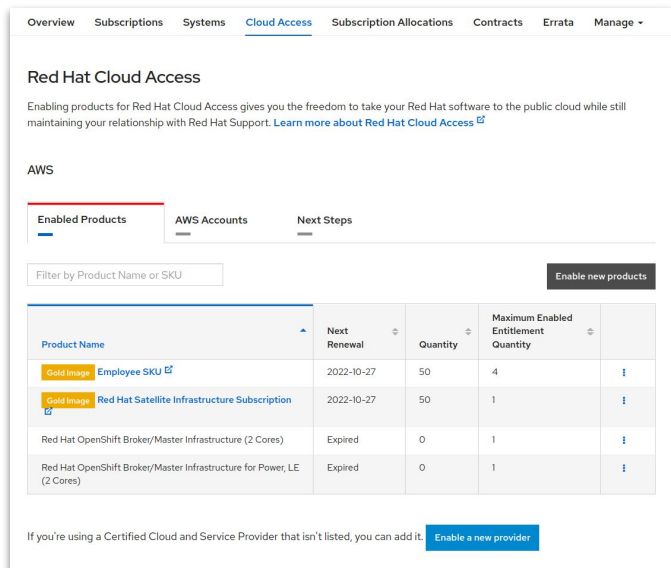
以下の方法で登録することで、[Subscription Watch](#)で計上が行われます。

1. [Cloud Access Customer Interface](#) で利用クラウドプロバイダと製品のエンタイトルメント数を入力
2. 各システムで insights-client または subscription-manager によるシステム登録



# Cloud Access Customer Interface + subscription-manager

## 1. クラウドプロバイダの種別と本数割り当て



The screenshot shows the 'Red Hat Cloud Access' page in a web interface. The navigation bar includes 'Overview', 'Subscriptions', 'Systems', 'Cloud Access' (selected), 'Subscription Allocations', 'Contracts', 'Errata', and 'Manage'. The main heading is 'Red Hat Cloud Access' with a subtext explaining that enabling products allows taking Red Hat software to the public cloud while maintaining support. Below this, there's a section for 'AWS' with three tabs: 'Enabled Products' (active), 'AWS Accounts', and 'Next Steps'. A filter box 'Filter by Product Name or SKU' and a button 'Enable new products' are present. A table lists enabled products with columns for Product Name, Next Renewal, Quantity, and Maximum Enabled Entitlement Quantity. The table shows two active subscriptions: 'Employee SKU' and 'Red Hat Satellite Infrastructure Subscription', both with a quantity of 50 and a next renewal date of 2022-10-27. Below the table, there's a note about adding new providers and a button 'Enable a new provider'.

Product Name	Next Renewal	Quantity	Maximum Enabled Entitlement Quantity
Gold Image Employee SKU	2022-10-27	50	4
Gold Image Red Hat Satellite Infrastructure Subscription	2022-10-27	50	1
Red Hat OpenShift Broker/Master Infrastructure (2 Cores)	Expired	0	1
Red Hat OpenShift Broker/Master Infrastructure for Power, LE (2 Cores)	Expired	0	1

## 2. 各システムでの登録

```
# subscription-manager register
```

OR

```
# insights-client register
```

OR

```
# rhc connect
```

# Hybrid Cloud Console の sources機能

## マッチするケース

- アクティブかつ未使用のRed Hat サブスクリプションがあり、AWSおよびAzureで使用する予定。
- ハイブリッドクラウドインフラストラクチャー全体で、Red Hat サブスクリプションおよび目的のエンタイルメントの使用状況を一箇所で表示および管理する必要がある。
- Red Hat の製品およびクラウドプロバイダーの対象となるガイドラインを自分で考慮するつもりがない。
- **ゴールドイメージを使用する予定。**

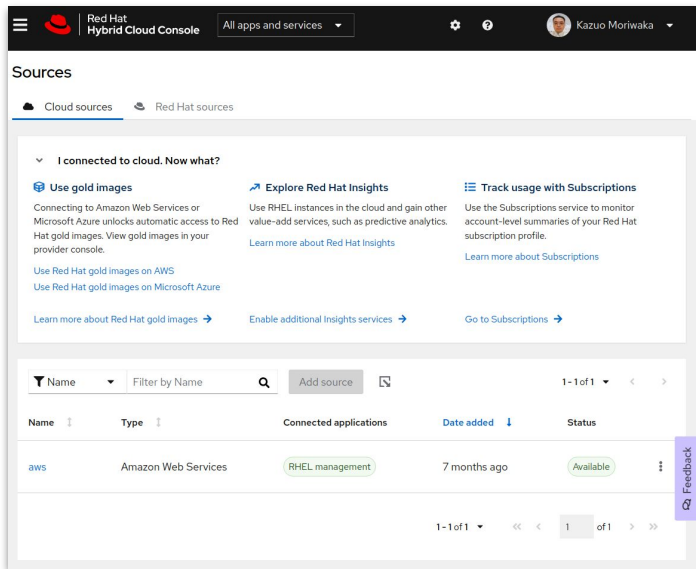
以下の方法で登録することで、[Subscription Watch](#)で自動計上が行われます。

1. [Hybrid Cloud Console の Sources機能](#) に、AWSまたはAzureを登録する

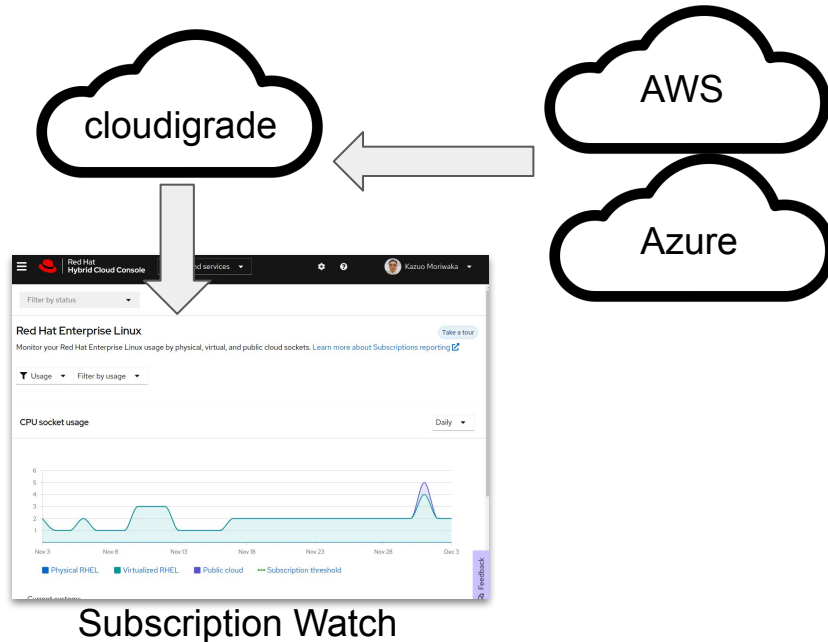
**自動的に計上するための仕組み(Cloudigrade)が動作します。**

# Hybrid Cloud Console の sources機能

1. AWSまたはAzureをSourceとして登録



2. Cloudigradeが自動的に利用情報を収集  
Subscription Watchで閲覧可能



## 簡単な比較

	Cloud Access Customer Interface + subscription-manager	Hybrid Cloud Console の sources機能
各システム上での登録	必要	不要
事前のエンタイトルメント振り分け	必要	不要
自動追跡用のクラウド設定	不要	必要

## まとめ

契約を守るためにはノードやvCPUを数えて「購入しているサブスクリプションで対応する数を越えていない」と確認する必要があります。

Red HatはCloud Access時に適切にノードやvCPUを数えるための仕組みを複数用意しています。

Red Hatの提供する仕組みを利用することは必須ではありませんが、利用しない場合は独自に管理が必要です。

# 関連リンク集

- 公式ドキュメント: Red Hat Cloud Access リファレンスガイド  
[https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red\\_hat\\_subscription\\_management/1/html-single/red\\_hat\\_cloud\\_access\\_reference\\_guide/index](https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_subscription_management/1/html-single/red_hat_cloud_access_reference_guide/index)
- Cloud Access Customer Interface  
<https://access.redhat.com/management/cloud>
- Subscription Watch  
<https://console.redhat.com/insights/subscriptions/rhel>
- Hybrid Cloud Console の Sources機能  
<https://console.redhat.com/settings/sources>